

(公益財団法人) 交流協会主催 2012 年度第 1 回日本語教育巡回研修会
「ひとりできる・みんなとできる<教え方の改善>」¹

国際交流基金日本語国際センター 八田直美

0. はじめに

皆さんは、「教え方の改善」の研修会と聞いて、どんな内容を想像しますか。「読解の教え方」や「発音指導法」のような研修会と違って、具体的な内容がイメージしにくいテーマかもしれません。一方、読解や発音指導などの研修会に参加した後、そこで学んだことを使って教え方を改善しようとして、どうしたらいいのかわからなかったという経験はありませんか。また、教え方を改善したいけど何から始めたらいいのかわからないということはないでしょうか。

今回の研修会では、参加者の皆さん1人ひとりが自分の教え方を改善するための第一歩を発見することを目標にしました。そして、改善するための課題や問題をどうやって発見するか、また、発見した課題や問題についてどうやって改善（解決）案を考えるかを取り上げました。

1. 「教え方を改善する」とは？

(1) 教え方の改善のモデル図

ここでは「教え方を改善する」とは、「今の教え方よりもより効果的な教え方を考えて実践すること」とします。そして、そのためには次の2つのことが必要だと考えます。

- ①日本語教育や学習についての新しい知識や技能を学んで身につけること
- ②自分の教え方をふりかえること

そして、この2つはスライド5²のように改善にかかわっています。①は、本を読むこと、他の教師と話すこと、研修会に参加すること、最近ではインターネットで調べることなど、いろいろな方法でできます。今回は、②の教え方をふり返ることから始めます。ふり返るといのは、「思い出して、よく考えること」（辞書的には、背後を見る、過去を顧みること）ですが、改善にかかわる「ふり返り（ふり返ること）」は1つの行動ではなく、See→Plan→Do→Seeの継続的なプロセス、サイクルになった行動です。普通、プロジェクトの運営は、「Plan（計画）→Do（実行）→See（確認・評価）」で行うと言われますが、教え方の改善では少し順番を変えて、「See：問題の発見」→「Plan：改善の計画」→「Do：改善の実行」→「次のSee：改善の評価」で考えていきます。

(2) 「教え方の改善」が必要な理由

教え方をふり返る前に、どんなことが改善の対象になるのか、またなぜ改善が必要なのかを考えてみましょう。

スライド6「質問1 教師の様々な悩み」には、皆さんが経験した悩み、また現在抱えている

¹ 本稿は、2012年11月9日（台北）、10日（台中）、11日（高雄）で行われた研究会の内容をまとめたものです。この研修会の内容は、国際交流基金（2010）『教え方を改善する』（国際交流基金日本語教授法シリーズ第13巻、ひつじ書房）をもとに構成しました。

² スライド番号があるものは、資料をご覧ください。一部、当日配布資料を変更した部分があります。

悩みに近いものはありませんか。発音、文法、日本語レベルと教え方や目標設定の違い、日本語の知識と運用力の関係、テストや評価の方法、そして教師自身のやる気や意欲の悩みなど、教え方の改善にはさまざまな内容や側面があります。

スライド7「質問2 改善が必要な理由」では、なぜ改善が必要なのか、またどんなときに改善が必要になるのかを考えてみました。教師の教え方が未熟だとか問題があるという理由だけではなく、教育・学習を取り巻く環境の変化によっても改善が必要になってきます。

スライド8「教師の課題と経験」では、3人の教師の悩みや課題を紹介しました。経験が浅い教師は、教える内容や方法に関心があることが多いです。ある程度の経験を積むと、自分が思うような授業ができるようになりますが、目標が達成できているかどうか気になってきます。そして経験が長い教師になると、授業だけではなく新しい教師の指導やコースの運営といった、教える以外の課題に取り組むようになります。

こうして見てみると、教師として学習者のためによりよく教える努力はずっと続きますが、それ以外にも改善に取り組むことが求められます。例えば、機関の方針や教材の変更、学習者の関心やニーズの変化、第二言語習得理論など教育や学習理論の発展、ICTを始めとする科学技術の進歩、少子化や人の移動の活発化といった社会の変化、そして教師の経験、役割の変化など、様々な状況の変化によっても、今まで問題なく、効果的に教えられてきた方法がそうではなくなるということが起こってきます。そこで、私たち教師は、教育を取り巻く環境に注意しながら、自らの教え方をふり返り、改善すべきこととその方向や方法を考えていかなければならないのです。

2. 教え方をふり返る

ここでは、教師が教え方をふり返るときに使うことができる6つの方法を紹介します。それぞれの方法が、何を手がかり（情報）にするか（教師自身の記憶や記録、学習者の意見、他の教師の意見）、何をふり返るか（あらかじめ決めたポイントかどうか）、「1人でできる」か「みんなとできるか」といった観点をもとに見ていきます。

①チェックリスト

チェックリストは、大事だと思っていることや確認したいことをリストにして、授業の後でチェックするものです。例えば、スライド11のような観点でチェックすることが考えられます。チェックの仕方は○×や点数をつけますが、そのときに大切なことは、なぜそう思うのか理由を書いたりコメントも記録していくことです。「授業がうまくいったか」「学習者は目標となることを学んだか」というような項目をチェックする場合、「授業がうまくいく」とはどういうことか「授業の目標」は何かを改めて考えてみるきっかけになります。この方法を1か月、1学期のようにしばらく続けていくと、チェックリストの結果にも変化が現れるかもしれません。また、授業の準備の仕方や授業中の学生の見方にも変化が現れることもあるでしょう。

②授業日誌

授業日誌は、授業中に感じたことや気づいたことを、授業の後で日記のように書くものです。スライド12のように、その授業でしたこと、気になったことを書いていきます。漠然と、ポイン

トを決めずにふり返っていても、くり返していくと、意識していなかった問題意識が明らかになることがあります。例えば、この例の場合、教師の質問に対する学習者の答えや学習者からの質問、自発的な発話に関心があることがわかります。チェックリストと同じように、この方法もしばらく続けていくと、書く内容に変化が見えてくることがあります。

③学習者アンケート

学習者が授業や学習についてどう思っているかアンケートをして、その結果から教え方をふり返る方法もあります。アンケートを作るときは、する時期や回数、使う言語や答え方のような方法と、どんな質問をするか内容を事前によく考えておくことが大事です。質問や回答方法の例をスライド 14 にいくつか紹介しました。アンケートを考えたり、用紙を印刷するのは手間や時間がかかるという場合は、例 4 のようにある程度自由に書ける質問を用意して、小さく切った白紙を配って書いてもらう方法があります。この方法のいいところ、そして大事なところは、学習者が今の教え方や授業についてどう考えているのかがわかることです。また、授業でわからなかったことを書いてもらうと、次の授業で説明したり答えたりできるので、学習者とのコミュニケーションにもなり、信頼関係を作ることにもつながります。

アンケートに答えることは、学習者にとっても、自分がどのように授業を受けたか、何を学んだかをふり返ることになるので、学習への自律的な姿勢を養う助けにもなります。

④授業の録画・文字化

授業中、自分がやっていると思っていたことと実際やっていることは違うことがあります。また、授業を録画したり、その映像を文字化したりすると、授業中とは違う見方で学習者を観察することができます。

スライド 16 は、ある教師の模擬授業の一部を文字化したものです。絵カードを見せて動詞の可能形を言わせるドリル練習の場面ですが、意外に教師の発話が多いことに気づきます。学習者が正しく言えたときでも、教師は改めて答えを確認して言っていますが、こうした部分が必要だったかどうかふり返って考えてみるができるでしょう。その他に、自分の話し方や口癖、視線なども自分ではなかなか気づかなかったことにも目がいけます。

文字化は時間がかかる大変な作業ですが、一部分（数分程度）でも気がつくことは多いと思います。また授業全体を見る（聞く）ときは、教師と学習者のやりとりにも着目してみてください。教師の質問に学習者が答え、教師はその答えを評価するというような、教室ならではの一方的なやりとりがほとんどになっているとしたら、日本語の授業の中で、日本語での自然なコミュニケーションの体験があまりできていないことになるのではないのでしょうか。

⑤教師同士の授業観察

ほかの教師に授業を観察してもらって、気がついたことを教えてもらう教師同士の授業観察も教え方をふり返る効果的な方法です。この方法では、見てもらう教師に、授業の前に何を見てほしいか伝えることと、授業の後で話し合うことが大事です。見てもらうポイントを伝えたり、話し合いの材料にするために、スライド 18 で紹介したような授業観察シートを準備するのもいいと

思います。(1)～(3)は自分が見てもらいたいと思っているポイントです。

この方法で大切なことは、教師同士の信頼関係かもしれません。教え方をふり返るための授業観察は、後輩教師が先輩教師のいい授業を見て学ぶとか、先輩教師が後輩教師の授業を見て指導するという目的とは違います。これは、見る側の教師にも気をつけてほしいことですが、自分の価値観や教え方の基準でアドバイスをするのではなく、授業をした教師がなぜこのようにしたか、自分がいつもする方法と違っていたか、まず考え方を確認する質問から始めるといいと思います。異なる考え方や方法の存在に気がつくことがこの方法の意味がある点だと思います。そう考えると、見てもらう教師だけでなく見る教師にとっても授業観察は自分の教え方のふり返りの機会になります。そして、このような授業観察の考え方は、指導を目的とした授業観察でもある程度同じではないでしょうか。

⑥ 教案

いい授業をするためには、教案を書いて、授業の目標や内容、説明の仕方などを準備しておくことが大切だとよく言われます。教案は、授業前の授業の準備だけでなく、教え方のふり返りにも使うことができます。

まず、授業前には、授業の目標や流れを考えますが、そのときに授業の目標の達成を確認する評価の観点を盛り込むといいと思います。目標を達成したかどうかを確認するための活動や基準とする観点を授業前に考えておきます。授業中は、教案を手元に置いて、進め方を確認します。予定外のことが起こって教案を変更したときは、その対応もメモしておくことで授業の記録になります。授業後は、教案を見ると授業の流れや細かい部分が思い出しやすくなります。授業をふり返って改善点を書いておくと、次に同じ内容の授業をするときに役に立ちます。授業後にもう一度教案を見直して、ひと言書き加えておくことを勧めます。

教え方をふり返るときは、自分の行動をできるだけ客観的に見てみることで、いつもの視点や考え方を忘れてふり返ること、そのために他の人の力を借りるといいです。「1人で」できる方法もいくつかあります。その一方で限界もあります。見えないことも多いし、1人よがり、自己満足になってしまうおそれもあります。ふり返るときには、学習者、そして同僚教師、「みんなと」いっしょにふり返ることができるのもっといいと思います。

3. 教え方を改善するための活動

教え方をふり返るときだけでなく、改善のための方法を考えるときにも他の人の視点はとても役に立ちます。今回は、みんなの共通の課題だと考えられる1つの課題をみんな考える〔タスク1〕と教師それぞれの課題をみんな考える課題〔タスク2〕を紹介します。

(1) 1つの課題をみんなで考える〔タスク1〕

ここでは「学習者のやる気を引き出す」を例にみんなを考えてみます。学習者のやる気は多くの教師の共通の課題であり、悩みかもしれません。始めは意欲にあふれていた学習者も続けるうちにやる気を失うこともあります。また、残念ですが、学生によっては必ずしも日本語を勉強し

たくて日本語の科目をとっているわけではないこともあります。その一方で、やる気の有無や量は、学習の成果に大きな影響を与えます。

次のような順番でいっしょに考えてみましょう。

- ①学習者のやる気を引き出すために、それぞれがやっていることを出し合う。
- ②「やる気を引き出す授業のテクニック」(スライド 34) を読んで、やる気を引き出すものになるものは何かを考える。
- ③自分たちがやっている方法(①)と②の8つの方法を比べる。
- ④他にどんな方法が考えられるか話し合う。

いろいろな教師が実際に使っている方法や「やる気を引き出す授業のテクニック」に書かれていたこと(スライド 22)を見てみると、学習者がやる気が出すのは次の3つのことがあるときではないでしょうか。

- ・感情：人と関わる、他の人に認められたい気持ち、好きなこと、興味があること、自分にとって意味があると感じられること
 - ・達成感：できた、やってよかった、役に立つ(実用的)
 - ・主体性：自分で考えた、自分で選んだ(やらされたことじゃない)、自分のこと→自律的に学ぶ
- この3つは相互に関係があって、バラバラなものではありません。いろいろなアイデアから、「やる気」はどこから出てくるか、考えられるといいでしょう。違う学習者、環境でも応用できます。教師としてたくさんの引き出しがあれば、学習者に合わせて新しい方法を考え出すことができるようになります。

「遅刻を少なくする」「(選択科目、日本語学校なら)学習者を増やす」などもみんなでいっしょに考えてみるいいテーマかもしれません。

(2) それぞれの課題をみんなで考える〔タスク2〕

次に1人ひとりの教師が抱える課題や問題をみんなでいっしょに考える活動を紹介합니다。これは実際にタイのバンコクで行った教師研修で参加者が取り上げた課題です。

大学教師 M 先生の場合

M 先生は、1年生の文法クラスを担当している教師。M 先生の課題は、ほとんどの学生が高校での日本語既習者だが、到達度に大きな差があることでした。授業では、初級教科書の後半や復習用教材を使っているが、自分たちはもう初級じゃない、前と同じことはやりたくないと言って、学生はあまりやりたがりません。皆さんが M 先生だったら、どうしますか。また、M 先生にアドバイスを求められたら、どうしますか。

実際の研修では、他の参加者のアドバイスとして、次のようなものがありました。

- ・授業の目標を明確にして、学生に伝える。
- ・四技能の練習を中心にする。
- ・学生に毎週授業の報告書を出させて、問題点を明らかにする。

M 先生は、その後技能を中心に進めることにして、どのように練習をするか学生に希望を聞くと、歌を使いたいと答えたそうです。歌の中で既習の文法項目を探して理解を確認したり、母語

に翻訳する練習をしたら、学生は積極的に参加するようになったそうです。今回のことを通して、M先生は、学生もいいアイデアを持っていること、学生自身のアイデアを取り上げて学ぶと主体的に参加するようになることがわかったと話していました。

大学教師L先生の場合

同じく大学教師のL先生の問題は、小学生の頃に日本滞在経験があり、他の学生より早く問題ができて時間をもてあましていてる学生がいたことでした。その学生の能力をもっと伸ばすためにはどうしたらいいか考えていました。

他の教師からのアドバイスは次のようなものでした。

- ・その学生の答えの正確さを確認する。
- ・特別な宿題や課題を出す。
- ・授業中、教師のアシスタントをさせる。
- ・その学生について他の教師と相談する。

その後L先生は、他の科目を担当する教師と話してみました。他の教師は、特別な宿題や役割を与えることにはあまり賛成しませんでした。その学生が上級生のための日本語能力試験の選択クラスに出られるようにしました。L先生は、作文担当の教師がその学生にもっと深く考えてほしいと思っていたことがわかるなど、同じ学生を教えている教師が学生について話し合うよい機会になったと話していました。

(3) みんなで考える利点

このような活動を取り上げた教師研修の参加者の意見をまとめてみると、みんなで考える利点として、次のようなことが見えてきました。

- ①さまざまな視点に気がつきやすく、より多くの改善方法が得られる。
- ②助け合い、励まし合って、それぞれの解決や改善に取り組むことができる。
- ③ほかの人に話したり質問に答えたりすることで、自分の問題がはっきりわかる。
- ④ほかの人の課題を聞いて、解決を助けることで、課題解決の練習をすることができる。

4. 「私の改善」を考える

(1) みんなで考える〔タスク3〕

皆さんも、自分自身の教え方の振り返りや改善の計画を立てて、ほかの教師と話してみましょう。それぞれの経験を話したり、改善のアドバイスをしたりするのもいいでしょう。

(2) いろいろな改善① 日本語教育ネットワーク図

改善について少し違った視点から見てみます。教え方を改善するというと、ふつう教室の中での授業のことを考えると思いますが、学習者と教師を取り巻く広い視点からも見ることもできます。スライド29のように、教室で教える教師や学ぶ学習者の外には、同じ機関(大学や学校など)のほかの教師や学習者がいます。また、その機関がある地域には、ほかの機関があったり、卒業生が日本語を生かして働いている場があるかもしれません。教師会が研修会を開くこともあるでしょう。その国には、日本や日本語教育について情報提供をしてくれる日本関連の組織もあるか

もしれません。そして、日本には、学習者の交流をしている提携校があったり学習者の留学先もあるでしょう。そうして関係図を描いて、次のようなことを考えてみるといいと思います。

- ・教え方のふり返りを助けてくれたり、いっしょに問題解決を考えたりする人がどこにいるか
- ・新しい教授法や研究についての情報を集める場所や機会がどこにあるか
- ・学習者の卒業・終了後の進路や社会のニーズはどこで確認できるか
- ・日本人との交流の機会や日本についての情報がどこで得られるか

(3) いろいろな改善② これまで・これから年表

次に、自分の学習歴、教師としての経験、参加した研修などを整理して、自分が今後進みたい方向を考える「これまで・これから年表」を書いてみるのも、教え方の改善につながると思います。日本語との関わりとそれぞれの時の気持ちをふり返ったり、これから教師としてどんな勉強や仕事をしていきたいか、将来どこで何をしているか、どんな教師になりたいか考えてみると、今、何をしたらいいかもわかるでしょう。

5. まとめ

今回は、教え方を改善するためにまず、自分がしていることを知って、教え方をふり返る方法を紹介しました。そして、課題や問題が発見できたら、その改善・解決のためにみんなでいっしょに考えてみることを体験してみました。ここでもう一度、スライド31の「教え方の改善モデル」を見てください。日本語教育や学習理論など関連分野の知識や技能を身につけることと教え方をふり返ることをうまく結びつけることが改善につながっていくと思います。また、改善は1つの課題では終わりません。1でお話したように学習者や社会の変化が教師に教え方の改善を求めることもあります。スライド32のように改善の後でまた新しい課題が発見され、その改善を考え、実行する、そしてまた次の新しい課題へ、というふうに改善が続いていきます。それが、教師の長いキャリアを考えた時に「成長」と呼べるものなのかもしれません。

3の(1)で、学習者のやる気を支えるものは、感情と達成感と主体性と述べました。教師も同じだと思います。ほかの教師や学習者といっしょに、助け合い、励まし合いながら、課題や問題を解決しながら、成長していくことで、達成感が得られます。それは、自分のためだけではなく、やはり目の前の学習者のためだからこそ、がんばることができるのではないのでしょうか。

6. 参考文献・参考サイト

(1) 研修会内容関連

スライド34を参照してください。

(2) 日本語教育について学ぶ

日本語教育、日本語教授法について学ぶことができる本は現在たくさん出ています。その中の1つに、国際交流基金日本語教授法シリーズ(全14巻)があります。14冊の構成は日本語教授法の中にどんな分野や内容があるか調べる時のヒントにもなると思います。

- | | | |
|-----------------|-------|----------|
| ① 教師の役割・コースデザイン | | * |
| ② 音声を教える | 言語項目 | |
| ③ 文字・語彙を教える | | |
| ④ 文法を教える | | |
| ⑤ 聞くことを教える | | 技能 |
| ⑥ 読むことを教える | | |
| ⑦ 話すことを教える | | |
| ⑧ 書くことを教える | | |
| ⑨ 初級を教える | レベル | |
| ⑩ 中・上級を教える | | |
| ⑪ 日本事情・日本文化を教える | 事情・文化 | |
| ⑫ 学習を評価する | | * |
| ⑬ 教え方を改善する | | * どう教えるか |
| ⑭ 教材開発 | | * |

各巻の内容の一部を紹介したものが国際交流基金『日本語教育通信』の「教え方のイロハ」としてまとめてありますので、ぜひこちらをご覧ください。

<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/tsushin/iroha/backnumber.html>

なお、このシリーズは交流協会（台北・高雄）の図書室で閲覧・貸し出しすることもできます。

(3) 改善を研究につなげる（アクション・リサーチ）

教え方の改善を研究につなげて、多くの人に知らせたり意見交換することもできます。「自分の教室の中や外の問題や関心があることについて、教師自身が理解を深め、教え方や学習者への接し方などを改善する目的で行われる調査研究」（横溝 2000）をアクション・リサーチ（action research）といいます。

例えば、政策研究大学院大学の『日本言語文化研究会論集』には、日本以外の国々で教えるノンネイティブ教師（日本語を母語としない教師）が取り組んだ研究が掲載されています。その中には、話す力の育成のように、各地の教師にとって共通の課題が多く取り上げられています。どのように教え方をふり返り、改善したか、また改善を評価したり、そこからどんなことが得られたかがまとめられています。環境は違いますが、こうした論文を読むことは同じ教師の皆さんに参考になると同時に、励みにもなるでしょう。それぞれ自分が関心を持つテーマに近いものを読んでみてほしいと思います。

横溝紳一郎（2000）『日本語教師のためのアクション・リサーチ』凡人社

政策研究大学院大学『日本言語文化研究会論集』<http://www3.grips.ac.jp/~jlc/jlc/essay.html>

この論集に執筆している修士課程の学生の指導には、国際交流基金日本語国際センターの専任講師もかかわっています。

以上